

小泉八雲（Lafcadio Hearn）を現代に生かす

小 泉 凡

Putting the Contributions of Lafcadio Hearn to Good Use in Modern Society

KOIZUMI Bon

様々な分野で活躍され非常にご多忙な小泉凡先生を、今年度、東西学術研究所の特別講演の講師としてお招きできたことは、西洋文学における異文化交流研究班の主幹として、誠に幸運なことでありました。小泉凡先生の曾おじいさんにあたるラフカディオ・ハーンは、ギリシャに生まれ、幼少時代をアイルランドで過ごし、その後アメリカでジャーナリストとして活躍、フランス領西インド諸島でもフリーライターとして現地の文化に強い興味を示しました。そして、そこからは、私達がよく知っているように、日本に渡り、日本人女性と結婚し、小泉八雲として教壇に立ち、同時に執筆に明け暮れる日々を送ります。まさしく、東西学術研究所の特別講演会にふさわしい「東西」、「文学」、「異文化交流」というキーワードにぴったりあてはまる人物です。今回の講演では、生前のハーンに関わるエピソードを交えつつも、過去のハーンを振り返るだけでなく、ハーンを現代に生かそうと、小泉凡先生が国内外で精力的に行っておられる活動について語っていただきました。小泉凡先生の国際的な活動は、アイルランドの全国紙である『アイリッシュ・タイムズ』やアメリカの新聞『ニューヨーク・タイムズ』にも、しばしば取り上げられ紹介されていることを付け加えておきたいと思います。たくさんの方々が聴きに来てくださり、会場は満員でした。素晴らしいお話をしてくださった小泉凡先生に感謝するとともに、出席してくださった皆様、この講演会のきっかけを作ってくださったアイルランド在住の伝統的な藁葺き職人ヒュー・オニール氏、そして、東西学術研究所所長の松浦章先生、事務室の濱生快彦さん、奈須智子さんにもたいへんご協力をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

和田葉子（西洋文学における異文化交流研究班）

はじめに

本稿は、2012年11月30日に、関西大学東西学術研究所で開催された第2回特別講演会の講演内容をまとめたものである。

2010年に松江で「ハーンの神在月—全国小泉八雲の会&ミュージアムの未来を考えるサミット」が開催されたのを契機に、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン／1850-1904 以下、ハーンとする）というアイルランド人作家を単なる文学研究者の研究対象の枠に閉じ込めず、社会に生かす方法を模索しようという機運が高まった。この催しには、全国に約30あるハーンの研究・顕彰団体と展示施設の担当者がはじめて松江に集い、「学校教育の場」「研究の場」「文化活動の場」「観光の場」で、ハーンがどのように現代社会に生かせるかを事例発表とパネルディスカッションで討議した。その結果、ハーンの生き方・精神性・作品はさまざまな現代社会のニーズに応える要素をもっているという共通認識ができ、団体間の絆が大いに深まった。

はからずも、その翌年の3月11日に起こった東日本大震災の際には、ハーンがはじめて西洋に日本の“Tsunami”という言葉と概念を伝えた作家であることを鑑み、被災地支援の企画展示を小泉八雲記念館で開催するとともに、「ハーンの神在月」で松江に集ったメンバーが緩やかな絆をつくり、仙台・石巻・気仙沼で活動を行ってきた「みちのく八雲会」に直接支援を行った。みちのく八雲会は、そのメンバーの大半が「NPO 元気みやぎ」の会員でもあり、避難所運営に関わっていた。各地の八雲会からの義捐金は、当初、なかなか届かなかった赤十字からの義捐金に先立ち、避難所運営における洗濯機の購入費用として大いに役立てられた。

さて、今日は、防災・共生・五感力・文化資源という4つの切り口から、ハーンを現代社会に生かす可能性を模索してみたい。

1. 防災

来日前のハーンは、アメリカとカリブ海の西インド諸島で約20年間をジャーナリストとして過ごした。その間、ニューオーリンズからミシシッピ川を下ったグランド島で、ハリケーンで滅んだラスト島の物語とその際に奇跡的に助けられた少女の逸話に関心を寄せ、小説『チータ』*Chita*¹⁾を書いている。また、カリブ海のフランス領マルティニークでは、活火山のプレー山の麓の町サン・ピエールや中腹のモルン・ルージュに住み、プレー山登頂も企てている。後にプレー山は1902年に大噴火を起こすが、その際には追悼文を記し、西大久保の自宅の庭に龍舌蘭を植え、噴火で壊滅したサン・ピエールを忍んだ。

もともと自然災害に敏感だったハーンは、1894年10月27日には、神戸クロニクル紙に「地震

と国民性」Earthquakes and National Character という論説記事を書いた。地震や津波、台風といった自然災害が頻発する風土が、日本の「更新性」という文化的特色をつくったのではないか、遷宮という慣習もその象徴的なものと考えられるという推論だ。風土と国民性の関係が本格的に注目されるのは、和辻哲郎の『風土』（1931年）が上梓された後になるので、先駆的な風土論といえるかもしれない。

それから2年後の9月、帝国大学から招聘されたハーンは東京に移るが、東京到着直後にニューヨークの友人ヘンドリックに次のような手紙を送っている。

ひどい天候——洪水、家屋の倒壊、溺死。一連の自然災害の到来は、この国の森林伐採のせいだと思います。私が神戸を離れる直前に、ふだんは乾いて砂地がみえている川が雨の後、堤が決壊し、川の水が町中を一掃しました。その結果、数百戸の家屋が破壊され、百人が溺死したのです。それから、東北地方の津波のことをご存知でしょう、——たった二百マイルの長さでしたが——約三万人の命が奪われました。東部・中部地方では今も相当の地域が川の氾濫で水に浸かっています。琵琶湖の水面が上昇し、大津の町は水浸しです。²⁾

中でも上記書簡にある東北地方の津波には強い衝撃を受けている。それは1896年6月15日に三陸地方を襲い、約27,000人の犠牲者を出した明治三陸大津波で、ハーンはその後、まもなく「生き神」A Living God を執筆した。この作品は、1854（安政元）年12月に起こった安政南海地震の際に紀州広村の庄屋が、刈り入れたばかりの稲の束に火を放って村人に危険を知らせ、高台に避難させたという実話をもとにした物語だ。後に、中井常蔵氏によってリライトされた「稲むらの火」が国定教科書に採用されたことから一般に認知されるようになった。ハーンは作品を通して、津波の際にはとにかくすみやかに高台に避難すること、またその際に高い倫理観と勇気をそなえたリーダーが必要であることを説きたかったのではないか。もちろん「生き神」というタイトルには、生きている人間が神として祠に祀られることさえあり得るといって、西洋人には理解の難しい日本人の神観念を説く意図も含まれている。

この作品は、2005年に神戸で開催された国連防災世界会議の際に、子どもたちの防災教材として生かすべきだという議論があり、その後、内閣府の外郭団体として設置されたアジア防災センターがアジア各国のNGOと連携し、津波が起りやすい地域の言語へ翻訳したテキストを出版し、読み聞かせ活動も行っている。現に、2度目のスマトラ沖地震の際には、その効果が大きかったという。すでに、スペイン語、フランス語のほか、タガログ語、タイ語、マレー



10カ国以上の言語に訳された防災教材としての「生き神」(「稲むらの火」)

シア語、インドネシア語、ヒンディー語、ベンガル語、シンハラ語、ネパール語³⁾などに翻訳されている。

また、東ヨーロッパの国、クロアチアのミルナ・ポコトワツ・エンドリゲッティさんは、バイオリニストとして演奏に来た日本でこの物語に出会い、感銘を受け、帰国後にクロアチア語訳を完成させ自費出版して子どもたちに配布したという。

現代社会の中で、今後もハーンの「生き神」は、防災教材としての意義を持ち続けるだろう。

2. 共生

(1) 自然との共生

ハーンは1894年1月27日に、勤務先の熊本第五高等中学校の瑞邦館で「極東の将来」The Future of the Far East と題して講演し、以下のように述べている。

西洋と東洋が競争する場合に、確かなことは、最も辛抱強い、最も経済的な、最も簡素な生活習慣を持つ民族が勝ち残ることである。費用の多くかかる民族は、その結果ことごとく消滅するであろう。自然は偉大な経済家であり、決して間違いをしない。生存最適者は自然と最もよく共生でき、必要最小限の生活で満足できる人々である。これが宇宙の法則である。 中略 将来、日本が偉大な国になるかどうかは、——九州魂あるいは熊本魂、——すなわち素朴、善良、質素なものを愛して、生活での無用な贅沢と浪費を嫌悪す

る心を、いかに持ち続けるかどうにかかっているのだと申し上げ、結論にしたい。⁴⁾

この講演では、さらに将来は政治戦争から経済戦争の時代へと変化し、日本と中国はライバルとなり、その際コストの安い国が有利になると、現代を透視したかのような発言もしている。ジャーナリストとして世界の動きの中で、相対的に当時の日本を見つめていたことがわかる。つまり、日本の将来で最も肝要な点は、自然との共生を続けることと、物を追い求め過ぎず、シンプルライフを維持することだと説いた。

ハーンが嫌いなのは妻セツの回想によれば、嘘つき、弱い者いじめ、フロックコート、ワイシャツ、ニューヨークだったという。一見、脈略がなさそうな項目にも見えるが、ハーンにとって、ニューヨークでの自らの体験をそのまま告白したものともとれる。物質文明が発展すると、形あるものが重視されるあまり、豊かな精神がないがしろにされるという自らが体感した悲痛な叫びでもあった。

以下に示す1893年12月14日付けのチェンバレン宛書簡には、やはりハーンが物質文明とその対極にあると考えた超自然的世界に対する価値観が端的に示されている。

人生の野望や向上心を生み出してきたものは何でしょう？それは霊（ghosts）なのです。神々と呼ぶ人たちもいれば悪魔という人もあり、天使という人たちもいます。そのものたちは人のために世界を変えてきました。人に勇気と目的を与え、自然への畏怖がしだいに愛へと変わることを教えました、——そのものたちは、見えない世界が持つ意味と動きをあらゆることに吹き込みました、——恐怖と美の両方を生み出してきたのです。

霊も天使も悪魔も神々も今はいません。みな死に絶えました。電気と蒸気と数学でできた世界は、がらんとして冷たく、虚ろです。⁵⁾

すでに1893（明治26）年の熊本で物質文明に支配された都市の虚しさを訴えていた。このたびの東日本大震災でも、10億を投じて完成させた自慢の堤防が一瞬にして海の藻屑と消えたことを目の当たりにすると、116年前のハーンの叫びが説得力をもって現代社会に蘇るような気がする。

松江で堀端にある庭つきの家を見つけ、念願の武家屋敷に住んだハーンは、その庭の観察を通して日本人が自然を支配するのではなく、人間の方が自然に合わせていく謙虚な生き方をしていることに気付く。そして、自らも、小さな池に住みついている主（蛇）が池の蛙を捕ろうとして蛙が断末魔の叫びを放つ寸前に肉片を蛇に与え、蛇の空腹を救うとともに蛙の命を救う

のだった。「日本の庭」In a Japanese Garden で、次のように述べている。

樹木には魂があるという考え、これは日本のウメの木やサクラの木をみたことのある人なら、さして不自然な想像とはおもわないだろう。げんに出雲その他の地方では、この考えは一般庶民の信仰になっている。中略 樹木というものを「人間の効用のために創造されたもの」と考えていた、昔の西洋の正統な考え方などよりも、かえってこの方が、はるかに宇宙的真理に近いものとして首肯できるともいえよう。⁶⁾

ここでも、自然に対してナイーブで謙虚にふるまう日本人の精神性を評価していることがわかる。

さらに日本人は、蛙のような西洋人が醜く厭うべきもの、あるいは笑い草の対象と決めつけている生き物をも真面目な芸術の対象にしていることに注目した。それは、俳句の中に蛙を詠んだ句が意外にも多いことからわかるとし、「最も健康的で幸福な姿勢」と、日本人の開かれた心を賛美した。ハーンは後に「蛙」Frogs⁷⁾を執筆し、約30句の俳句の英訳を試みている。

(2) 異文化との共生

ギリシャに生まれ、アイルランドに育ったハーンが、アメリカ時代に最も長く住んだのはクレオール文化の聖地ニューオーリンズだった。同地は、1718年にジャン・バティスト・ル・モワン・ビエンヴィルの指揮のもとにフランス人によって建設されたことから、「ラ・ヌーヴェル・オルレアン」(「新しいオルレアン」)という名がつけられた。先住民のチョクトーインディアンと入植したフランス人、さらに西アフリカがルーツの黒人奴隷たち、カナダのアルカディア植民地から来たケージャンと呼ばれるフランス系カナダ人たちの文化が接触・融合してニューオーリンズ独特のクレオール文化(混雑文化)が誕生した。クレオール料理やジャズ(クレオール音楽)などはその典型とされる。

ハーンはニューオーリンズで10年ほどジャーナリストをした後、フリーのライターとしてカリブ海の仏領西インド諸島のマルチニーク島に赴き、約2年間にわたり現地の人々と生活を共にし、人類学者のごとくフィールドワークに明け暮れた。同地もニューオーリンズと類似した文化環境にあることは言うまでもない。

そもそもハーンがシンシナティからニューオーリンズへ移ったきっかけは、シンシナティで混血女性マティ・フォリーと異人種間の婚姻を禁止したオハイオ州の法律を犯した結婚による、コミュニティからのドロップ・アウトという現実があったからだ。しかし、マティとの結婚は、

ハーンが混淆文化を受け入れるオープン・マインドを持っていたことの証ともいえる。自らも、アイルランド人とギリシャ人の混血であり、古代に遡れば、ギリシャ・ケルトとも多神教世界という点で共通しており、イエズス会の神学校での苦い経験から、宗教的寛容性についてもその必要性を強く認識していた。

だからハーンはニューオーリンズではクレオール文化に魅了され、クレオール文化を探究し、その成果を小説、紀行文、新聞・雑誌記事、料理のレシピ集、諺辞典など多様なジャンルの出版を通して世界に発信した。

マルティニーク出発前にはニューヨークで「ディテクティブ」というフランス製のカメラを、106ドルをはたいて購入し、島の生活風景を文章だけでなく写真でも記録した。20年余り前、その写真が当時東京世田谷にあった我が家の押し入れから発見された時の驚きは忘れられない。ハーンは来日時これらの写真を持参したのだ。しかし、その後、松江・熊本・神戸・東京と移り、さらに没後、都内で11件も引っ越しをし、関東大震災や戦災をもくぐり抜けてなおも写真が現存することは奇跡的とさえ思える。

1995年5月、この写真のコピーを携えて、はじめてマルティニークを訪ねた。幸運にもカリブのカリスマと言われ、作家でフランスの国会議員でもあるエメ・セゼール氏に写真を手渡すことができた。セゼール氏はいきなり私を強くハグし、「ヤクモ・コイズミ！」と叫び、プレー山噴火以前のサン・ピエールの街並の写真に目を凝らした。19世紀末は、まだ人種の混血や文化の混淆は正統ではないというヨーロッパ中心主義の価値観の時代だが、その中でハーンははじめてマルティニークのクレオール文化を人類学的視点で観察し、プラスに評価した人物であることに敬意を示された。セゼール氏に別れを告げて町に出ると、島の首府フォール・ド・フランスの中心に「ラフカディオ・ハーン・パーキング」と命名された公営駐車場を見つけ、不思議な嬉しさが込み上げた。ポスト・コロニアリズムの現代にハーンの開かれた心が評価されたように感じたからだ。

なお、このようなハーンのオープン・マインドを現代に生かす実践活動については、最後の「文化資源」の項目で言及する。

3. 五感力

ハーンはアイルランドの語り部キャサリン・コストロから日々怪談や妖精譚を聞かされ、ケルト口承文化の語りの中で育まれた。ハーンの開かれた耳はそのようにして育成されたが、さらに、16歳での左眼失明が、五感を駆使して文化を観察する態度を皮肉にもいっそう強めることになった。松江の町についても、「米搗きの音」「洞光寺の鐘の音」「地藏堂の勤行」「物売り

の声」「大橋の下駄の音」（「神々の国の首都」『知られぬ日本の面影』）など「サウンドスケープ」という言葉が1960年代にカナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱されるはるか前から、町の音を、文化の一翼を担う重要な要素として受け止めていた。

2004年に松江でハーン没後百年の記念事業の内容を検討している時、中央の学会を誘致することもよいが、未来の松江を担う子どもたちにハーンから継承すべきものをしっかりと伝えるような実践をすべきだという議論がなされた。そこで、何を継承すべきかと考えた時、ハーンの五感力こそ現代の子どもたちに伝えるべきだと感じた。

ちょうどその頃、新聞のコラムに、現代の小学生のうち日の出や日没を肉眼で見たことない子どもが40%、魚捕りや虫捕りをしたことがない子どもが50%、またある小学校で「人間は生まれ変わると思うか?」という教師の質問に対して「生まれ変わると思う」と答えた子どもが40%近くを占めたという報道がなされた。「生まれ変わる」と答えた子どもは、輪廻転生といった死生観ではなくゲームのリセットの感覚でそう答えたという。バーチャル体験の急増と五感体験の不足は、因果関係はまだはっきりしないものの、現代の子どもたちに顕著にみられる感情のコントロールの不全という問題と深い関係にあるのではないかと危惧されるのだった。

そこで、日常的に五感体験が欠如している現代の子どもたちに、ハーンの行動の追体験を通し、五感力を育み、好奇心と想像力を高め、地域文化への親しみを促し、感情の十全なコントロールができる人間をめざそうという趣旨で「子ども塾—スーパーへるんさん講座—」を実施することとした。ハーンを学ぶだけでなく、ハーンの行動を追体験する目的ゆえに「スーパー」と名付けた。対象は小学校4年生から中学生で、松江市観光文化課と連携し、夏休み期間中に3・4日程度開催し、初回より塾長をつとめている。毎年、テーマと活動場所を変えて実施し、今年（2012年）で9回目となる。過去8回の概要は以下の表の通りである。

年度	活動場所	テーマ	成果発表方法	備 考
2004年	松江城周辺	町の音	新聞づくり	
2005年	松江市忌部高原	蝉の声	アートによる表現	
2006年	松江市島根町	怪談を聴く	怪談の再話・創作	
2007年	松江市美保関町	海辺の生活と民話	民話の再話・創作	
2008年	松江市八雲町	自然と民俗信仰・学校の怪談	自由表現	
2009年	出雲市平田町	虫の音の聴き分け	自由表現	兵庫県立「人と自然の博物館」と連携
2010年	松江市白潟・城西地区	明治の面影体験	絵手紙	
2011年	松江市カラコロ工房	怪談屋敷	怪談屋敷の制作	

今年のテーマは「発見！ヘルンさんが見た松江」で、八雲同様に散歩を楽しみながら松江の町を観察、再発見し、地元写真家とグラフィック・デザイナーの協力を得て、子どもたちが町で撮ったお気に入りの写真を、フェイスブック機能を使って、小泉八雲記念館のウェブサイトに投稿。同時にプリントアウトし、3日間の体験を各自模造紙にまとめ、市内の観光施設「カラコロ工房」地下金庫室で2週間の展示を行った。同時期に市内の小泉八雲記念館で、企画展「『知られぬ日本の面影』を旅する」を開催したため、展示との有機的つながりも視野に入れて実施した。

子ども塾の効果は数字で測ることは難しい。しかし、松江城の中でふたりペアになって1人が目を閉じて歩くブラインド・ウォークをした際、ある女子小学生が、「はじめて森の臭いを感じた」「目を閉じただけで不安になった。へるんさんは目がほとんど見えなかったから、ずっと不安の中で生きていたのではないかと話した。また、松江市八雲町の荒神の巨大な神木を観察した際、「この大きな椎の木には他の種類の植物がいっぱい住んでいる」ことを見つけた生徒もいた。相手の立場でものを考えたり、共生の意味を理解したり、外部の情報は目だけでなく鼻からも伝わることを認識したり、それなりの成果があったのではないかと考えている。そして、参加者のほとんどが地域の身近な対象物にこんなにも興味深い事実が隠されていたことを驚いていた。初回の子ども塾に参加した生徒で、すでに私の勤務先である島根県立大学短期大



「子ども塾」で下駄の音を聴く

学部松江キャンパスの総合文化学科で地域文化を学び卒業した学生もいる。子ども塾の体験が地域への関心を開いたからだという。その点では、五感力を育むことは地域文化への関心を養うことにもつながるのだと思う。

4. 文化資源

近年、未発掘の地域文化を掘り起こし、資源として社会的に活用する方法を探究する、文化資源学という学問分野が注目されている。2000年に東京大学大学院に文化資源学専攻が設置され、2002年には、多くの死蔵され、消費され、活用されないまま忘れられていく資料を、新たな文化を育む土壌として資源化し活用可能にすることを目的として、文化資源学会が設立されている。

その背景には、新たな法律の制定がある。1950年に制定された文化財保護法が、「もの」としての文化財の保存を重視したのに対し、2001年制定の文化芸術振興基本法は、「もの」としての文化財から「こと」としての文化芸術活動の振興を重視している。すなわち、保存から活用へと力点がシフトしたわけだ。

また観光のスタイルがマスツーリズムから少人数、目的志向、体験重視の観光スタイル（オルタナティブ・ツーリズム）に変化したことがあげられる。その結果、現地の行政、NPO法人、商店街などによる地元視点での体験型の着地型観光プランが各地で生み出されている。それはインバウンドを重視した観光スタイルであるともいえる。マスツーリズムの時代には、出発地の旅行会社のプランナーが出発から帰着までの旅程を作成していたが、今は、到着地の団体が地元だからこそできる体験型プランを提案し、大手旅行会社がそれを目玉として観光客を送り込むニューツーリズムの時代が到来している。

そのような動きの中で、小泉八雲を松江の人的資源、またハーンによって再話された作品や偏見の少ないオープンマインド（開かれた精神性）を文化資源として捉え、ツーリズムや文化創造に生かす取り組みを実践している。最後に、文化資源という切り口からの一連の取り組みをご紹介します。

(1) 怪談の資源化をめざす文化観光～松江ゴーストツアー～

松江ゴーストツアーは、城下町松江に豊富に伝承される人柱伝説をはじめとする怪談を、着地型観光プランとして生かす実践である。怪談は地元の民話研究者やハーンがすでに活字にして書承文芸となっているが、資源的活用には至っていなかった。

発想のきっかけは、ダブリンのゴーストバスだった。2005年に私が事務局をつとめる山陰日



松江ゴーストツアー（月照寺）

本 아일랜드 協会のメンバーと共にダブリンに滞在した際、お化けの絵でラッピングされたダブルデッカーのバスが市内を走っていたので、気になって正体をつきとめると、ダブリン市交通局が主催する、ダブリン・ゴーストバス、つまりガイドの怪談を聞きながら2時間を楽しむゴーストツアー専用のバスであることが判明した。翌朝、さっそくチケットを入手し、その夜ゴーストツアーを体験した。ツアーは欧米各地からの観光客で大盛況で、劇場のような車内の雰囲気とガイド（プロの語り部）の怪談が人々を魅了した。途中数カ所の墓地で下車してさらに話を聞く。またブラム・ストーカーの書斎を眺めエピソードを聞いたりもする。文学の都であるダブリンの長所がみごとに生かされ、怪談による恐怖の躍動感だけではなく、知的好奇心をも刺激された。

翻って、松江を眺め渡したとき、同じように豊富な怪談が伝承され、作家ハーンによって主な怪談は英語で再話されて世界に発信されていることを改めて感じた。つまり書承にはなっているのだが、ダブリンのような資源化は全くされていないことに気づいた。帰国後、ただちに、2006年から指定管理者制度により小泉八雲記念館の管理運営はじめたNPO法人松江ツーリズム研究会と相談し、同年夏に試験的に松江市交通局からレトロ調のレークラインバス（観光ループバス）を借り上げ、私がガイドをつとめるゴーストツアーを実施したところ、参加者から好評を得た。その後、恒常的な観光商品化を検討し、国土交通省のニューツーリズム創出・流通促進事業の補助金を得て、ガイドの公募、研修を行い、4名のプロのガイドを育成した。ガイドには、小泉八雲研究、郷土史研究、口承文芸研究、語りの技法、ホスピタリティー論という

5つの観点から、かなり本格的な研修を受けてもらい、プロのガイドとしてのモチベーションを高めてもらった。

そして2008年8月から「カラコロコース」（ゴーストツアーのみ1,500円）と「へるんコース」（講演・宍道湖七珍の会席料理付き、5,800円）の2コースを設定し、松江城内のぎりぎり井戸、月照寺、清光院、大雄寺などの怪談スポットを2時間余りかけて徒歩で巡る「松江ゴーストツアー」がスタートした。予想以上の好評を博し、2012年11月末までに、夏場と週末を中心に、168回実施し、2,798名の参加者に恵まれた。当初は県内者が多くを占めたが、ここ2年ほどは70パーセントが県外者となり、ガイドの指名までかかるようになった。このような着地型観光プランが4年以上赤字を出さずに継続した例は全国でも皆無だという。

松江ゴーストツアーを展開する中で、ゴーストツアーの先進地といわれる、ロンドンとニューオーリンズのゴーストツアーも視察してきた。いずれの都市も、ハーンが過去に滞在した町であることは偶然というべきか必然というべきか。しかも、ロンドンでハーンが一時期住んだとされるブラックフライアー橋の付近はとりわけ怪談が多く、ロンドン・ゴーストツアーにとっては最重要な場所だし、ニューオーリンズのゴーストツアーも基本的にはハーンが住んだフレンチクォーターの中で行われる。いずれの地も多く旅行会社が複数のゴーストツアーのメニューを提供し、また多くの観光客が夜の街を耳で楽しむ光景がみられた。

この10月中旬に3年ぶりに訪れたニューオーリンズでは、ジャズの中心がフレンチクォーターからその東側のフレンチマン通りに移ったことから、夜の下町にはゴーストツアーに参加する観光客の姿が一段と際立つようになっていた。グレイライン社ニューオーリンズ支社長のジム・フィエル氏は、支社の収入の5パーセント以上をゴーストツアーが占めるようになり、今後もいっそうこの企画を重視したいと話してくれた。世界的なスピリチュアルブームが背景にあることもうかがえるが、いずれのゴーストツアーも単なる肝試しではなく、「フレンチクォーターの怪異」「ヴードゥークイーン・マリーラボール探訪」「吸血鬼譚探訪」などテーマとストーリーがしっかりしていること、これが観光客の心を揺さぶるのだと思われた。

今後も、松江では「豊かな遊び心」「耳で楽しむ夜の松江」「闇への畏怖の念」「地域文化（小泉八雲）の魅力を楽しみながら学ぶ」という4つのキーワードを忘れずに、いっそう進化させていきたいと思う。怪談という無形の資源と小泉八雲という人的資源を観光に生かす取り組みは、方向性さえ誤らなければ、巨額の投資の必要がない新しい経済活動としても一定の意味があると考えている。

（2）芸術資源としての小泉八雲の世界～“The Open Mind of Lafcadio Hearn 展”～

もうひとつの取り組みは、小泉八雲の偏見の少ない開かれた精神性、すなわち現代社会に求められる「共生の思想」を、現代アート作品や初版本・原稿・遺品の展示とともに紹介するプロジェクト“*The Open Mind of Lafcadio Hearn 展*”である。アート作品は、世界のアーティストにウェブ上で呼びかけ、共感するアーティストから八雲の精神性や生き方をテーマとした造形作品を寄せてもらう。寄贈が原則なので、美術館が行う特別展の5分の1か10分の1程度の予算規模でも実施できるのが特徴だと思う。発案者はギリシャ・アテネで八雲会インターナショナル・コーディネーターをつとめるタキス・エフスタシウ氏で、彼が長年、アートにかかわる仕事をしてきたことからこの発想が生まれた。

形にするためには多くの苦難が立ちはだかったが、家内が中心となり、小泉家が全力をあげて実現に向けた努力をした。共感する企業に支援もとめ、資金獲得にも奔走した。そうしてようやく、2009年10月にギリシャ・アテネのアメリカンカレッジで第1回目の造形美術展“*The Open Mind of Lafcadio Hearn*”が実現した。世界の約十か国のアーティストから寄贈された作品47点とともに、ハーンのオープン・マインドをうかがわせる文章を、「偏見のない美意識」「人間中心主義への警告」「偏見のない人種観」「開かれた耳と音楽観」などキーワード毎に選び、抜粋して壁面に紹介した。オープニングの会場は予想外の来訪者でごった返し、翌日、一斉にマスコミがその様子を報道したことから、ギリシャ国内ではじめてラフカディオ・ハーンなる作家が認知される機会にもなった。当時のアテネ駐在の北村日本大使は、民間でこのような文化交流を促進する企画を行ったことに深い敬意を表しますと大いに喜ばれた。

第2回目は2010年10月に松江城天守閣と小泉八雲記念館で、第3回目は2011年10月にニューヨークの日本クラブで⁸⁾、そして第4回目の今年は、ニューオーリンズのテュレーン大学で実施した。松江開催時には、展示期間中の松江城の登閣者数が通常の1.5倍となり、自分のアート作品が「サムライ・キャッスル」に展示されるならと、ギリシャ・イギリス・アイルランド・オランダ・アメリカなどから出品したアーティストが自費で駆けつけてくれ、関係国大使も来訪され、予期せぬハーンがとりもつ国際交流が実現した。重要文化財の天守で現代アート展を実施するには、やはり多くの困難があったが、結果的には松江城の底力が作品やパネル展示を輝かせてくれた。

展示品は、毎回、開催地にふさわしい内容に調整する。今年は、アート作品のほかに、開催地を意識し、ニューオーリンズ時代にクレオール文化をテーマにハーンが出版した初版本を重視する展示とした。私自身は展示品解説、オープニングでの講演会、現地での展示作業等を行った。講演のテーマは“*The Open Mind of Lafcadio Hearn*”とし、混淆文化の聖地でハーンの

オープンマインド（開かれた精神性）がいかにか熟成されたか、またその精神性を現代社会に生かす必要性について言及した。なお、ニューオーリンズ市と松江市は姉妹都市であり、この文化事業を契機に、市民レベルの交流にも弾みがついた。

この事業は、単なる小泉八雲の顕彰事業ではなく、ハーンを二次的に活用した文化創造をめざすプロジェクトと認識している。またこのプロジェクト自体を松江の文化資源と考え、松江市の魅力とともに世界各地で紹介する試みでもある。

効果として、地域の人的資源としての「小泉八雲」への新しい意味づけ、また文学と芸術という異分野のコラボにより多分野の人々の関心を喚起し、出会いの場を提供すること。さらに、小泉八雲が足跡をのこした世界各地で開催することにより、松江と開催地の人々が異文化理解と交流を深めるといった点を期待している。

また、今年9月には、ハーンが居住または夏期に滞在したアイルランドのダブリン、コング（メイヨ州）、トラモア（ウォーターフォード州）を訪れ、2013年度の“The Open Mind of Lafcadio Hearn”開催計画を関係者と相談し、アイルランド開催に向けた準備を始めている。

おわりに

ハーンは、近代西洋が、合理性を重視するプロテスタンティズムの精神に基づき推進してきた物質的な豊かさを創り出す社会では、人間の幸福は得られないし、また人間世界で完結していると思ひ込むことは人間の傲慢さを増幅するという考え方をもっていた。言い換えれば、目に見えない異界とのつながりの中で人間は生かされるという感覚を持ち合わせていた。先年の東日本大震災は、人間と自然との付き合い方と「豊かさ」の意味をあらためて見直す契機をもたらしたともいえよう。

親日派のアメリカ人経済学者、J. K. ガルブレイスは、晩年、物が満たされた現代の世界は、今後 GDP（gross domestic product）、つまり「どれだけ物をつくったか」から、GNE（gross national enjoyment）「どれだけ人生を喜びで満たすか」という価値観にシフトすると語り、そのためには、日本は得意分野の知的産業を生かしてもっと世界に貢献すべきだと説いた⁹⁾。

そのような現代社会のニーズのために、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）というオープン・マインドで多面性をもつ人物を、単なる文学の研究対象という価値観から解き放ち、知的産業の分野で生かすことは、子孫として大きな意味のあることだと考えている。

注

- 1) *Chita*, A Memory of Last Island, New York, Harper & Brothers, 1889.
- 2) ハーンのエルウッド・ヘンドリック宛て書簡。Bisland, Elizabeth, *The Life and Letters of Lafcadio Hearn vol.2*, p.307, Houghton, Mifflin and Company, 1906.
- 3) 山に囲まれたネパールでは津波は起こり得ないが、NGOのメンバーが物語の内容に感銘を覚え、翻訳本が作られたという。
- 4) 桃井恵一・桃井祐一「ラフカディオ・ハーンの『極東の魂』」『京都創成大学叢書』第1号、133-134頁、2006年3月。
- 5) *Japanese Letters*, Edited by Elizabeth Bisland. (*The Writings of Lafcadio Hearn vol.16*, p.84, Houghton Mifflin Company, 1922) 翻訳は長岡真吾氏による。
- 6) 小泉八雲著・平井呈一訳『日本瞥見記』下、21～22頁、恒文社、1975年。
- 7) “Frogs,” *Exotics and Retrospectives*, Boston, Little, Brown, and Company, 1898.
- 8) 物質文明に支配された当時のニューヨークはハーンにとって最も苦手な場所の一つだった。しかし、来日計画、交友、来日後の著作の出版など、様々な観点からハーンの人生の中で極めて重要な場所であり、また現代アートの聖地でもある。会場となった日本クラブは1905年、高峰譲吉博士によって設立され、現在1,100人の会員を持ち、日米交流と在ニューヨークの日本人のために様々な文化事業を行っている。高峰譲吉とハーンは、出会いはなかったものの、ともにニューオーリンズ万博に熱中し、高峰は帰国後、ハーンのような日本の紹介者を政府はもっと優遇すべきだったと講演会で訴え、親愛の情を示している。ニューヨークでの開催は、上記の事情を鑑みて決定された。
- 9) J. K. ガルブレイス『わが人生を語る』155-159頁、日本経済新聞社、2004年。